



ランベス・パレスにてカンタベリー大主教
ジャスティン・ウェルビ一大主教と

四月から本学院に来て七ヶ月が経ちます。本学院はキリスト教に基づく全人教育の実践を掲げており、そのためチャップレンと呼ばれる学校付きの牧師が派遣されています。英国にも日本にもキリスト教系の学校が存在していますが、今日の社会においてはキリスト教だけでなく宗教系の学校とは「自らの文化・思想」というものを生徒に学ばせる、狭量な教育をしているところだと指摘する声があります。信仰は強制されないとしても幅広い視野を持たせる機会を失わせている、と言います。

日本の若手神学者の一人である宮平望氏(西南学院大学国際文化学部教授)は日本において子供たちの心を疲弊させているものの一つとして日本の受験社会を挙げ

アイルランドの詩人、ウイリアム・バトラー・イエイツの言葉に「教育はバケツに水を汲むことではなく、心を燃やすこと(Education is not the filling of a bucket, but the lighting of a fire)」というものがあります。単に「しなさい」と命じて勉強させるのではなく、生徒たちが自分で学び、考える心を養わせることであります。

「そんなことは承知している」という声が聞こえてきそうですが、バトラーの言葉は学校で学ぶ生徒だけでなく、生徒たちに関わる全ての人々にも当てはまる言葉でもあるように思います。

憮たたしい競争社会に生きる現代人の最優先事項は、目的達成の為の利益の確保、組織作りです。人間が生きる意味や心の問題について思索する余裕がありません。しかし、人間にとつて大切なことは絶えず自分自身の心を見て、自分の生きる意味を見つけ、様々な問い合わせを持って考え、困難や問題に向き合っていくことです。子供は大人の背中を見ます。私自身も両親やその他の大人の背中を見て学んできました。しかし、気がつけば自分も父親になり、加えて若い

困難や不安で生徒たちの心の灯火が消えてしまいそうな時もあるでしょう。その

本学院での七ヶ月の生活の間、勉強だけでなく、大自然に囲まれた敷地に咲くブルーベル見学、地域の人々と交わるジャパン・イブニング、球技大会、アウティング、ワインブルドンテニス観戦、オープニング、コンサート等、自然や文化、スポーツなど様々なものに生徒たちと共に触れています。

一目次一

	ページ
チャップレンより	1
2013 OPEN DAY	2~4
Cambridge Science Workshop	5
アウティング	6~7
Farlington School 訪問	8
アップルデイ	8
部活動の異文化交流	9
(茶道部、バスケットボール部)	
教科レポート	10~11
生徒の活躍	12

コラム
フライデイケーキ

チャップレンより
「灯火をともすこと」

チャップレン
司祭 林 和広
「灯火をともすこと」



第二六五号 一一〇一三一年十一月十一日
発行者 立教英國学院
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

ています。最小時間で最大効果を要求し、知識を詰め込むことだけに集中させ、記憶力の良い生徒が優秀だとされる、そのようなものが本来の教育なのだろうか、と問い合わせています。社会においては宗教教育が子供たちの視野を狭め、自由で開放的な学習の機会を奪っているとの見方がある一方で、宮平氏のような見方もあります。実際にはどのようなことが大切なのでしょうか?

世代の人々と関わる仕事に従事している生徒たちから見た自分の背中はどのようなものであるのだろうか?と考えてしまいますが。若い世代の心を鼓舞させ、火を灯すような背中を見せて、いるだろうか?と省みることができます。

キリスト教の精神は単に教義や道徳を教え込むことではありません。広い視野を持つて、学び、考え、成長し続けることができるように「共に」生きることを目指します。

日常の中にある食事や交わり、スポーツを通して学んで楽しむと同時に、この世界の様々な文化・慣習・問題に関心を持ち真摯に目を注いで探求することも大事にします。



もうすぐ、クリスマスが訪れます。喜びと希望の灯火の光が世界を照らします。その灯火の恵みが皆様の上に豊かに注がれるようにお祈りしています。

ためには生徒たちを支える周りの人々の心にしっかりと灯火が保たれていく必要があります。消えかかりそうな灯火に火を分かち合うために。教員と生徒がお互いに学院での生活を通して、学問を通して、この世界とそこに生きる人間にについて学んでいく、考えていくということを本学院は大切にしているのです。

支えられて、支えて
高二一一 岡田 元希

「展示本部がすることって何なんですか?」この言葉を何度も僕から聞いたことだろうか。こう聞く度に、僕はどう返すべきか迷っていた。展示本部としての最後のOPENDAYを迎えるまでは。

二年前、中三の二学期に初めて体験した立教のOPENDAY。日本の文化祭とは違い、一週間丸々授業なしで当日のために準備を行う。クラスで協力しあい、一つの企画を作り上げていく作業はとても新鮮で充実していた。

その一週間を支える為に、何週間も前から準備を行うのが展示本部だった。クラス企画にはほとんど参加せずに、全てをOPENDAYに捧げる。そんな先輩たちに憧れて、高一の春に僕は展示本部に入った。いざ入ってみると、その仕事の多さに驚いた。各クラスの企画用原稿のチェック、申請物の確認、教室の机やイスの移動マニュアル作り、物の貸し出し…。細かいことで数えあげるときりがない。そして、それでもこういった一つ一つの仕事がOPENDAYを支えていると思うと、無性に嬉しかった。全てが終わった日には、今までにない達成感を感じた。

あれから一年が経った。三人いた同学年の展示本部員は、各々の事情で辞めていき、僕は一人となつた。お世話になつた先輩達ももういない。一人でも大丈夫だろうなんて楽観的に考えていたけれど、現実は甘くなかった。何か問題にぶつかった時、周りに相談できなかつた。まだ何も分からぬ高一にも安易に相談できない。次から次へと仕事が迫つてくる。本当に不安な毎日だった。

夜眠る時、朝が来てほしくないと考えた日もあつた。でもそんな時に、高一の後輩が仕事を頑張つてくれて、友達が励まして



くれて、立ち直ることができた。本当は自分が支えなくちやいけないので、気づけば周りの皆が自分を支えてくれていた。おかげで僕はなんとか展示本部の仕事を全うできた。全ての仕事が終わつた今、去年とは違う気持を僕は味わつていて。去年は感じることのなかつた疲労感はもちろんだが、それ以上に成功して良かったという喜びと安心が、自分を支えてくれた人達への感謝の気持が、胸の中一杯に詰まつていた。

この二年間、僕は色んな人に支えられることで展示本部として活動できた。特にこの一年、そのことを本当に痛感した。目指し懐れてきた先輩達は越せなかつたかも知れないので、誰かに支えられることで僕は僕なりに学校を支えることができたと思う。だから僕は今、堂々とこう言いたい。自分たちを支えている人達をそれが展示本部なのだと。

大切な物に気付けた一週間 小六 大石 桜子

「お客様、来るかな?」

そう言しながらごした、オープンデイメント、そしてチャリティーなどフリープロジェクトの活動もある中、全員で仕上げたクラス企画は最高に良かつたです。

今回は中一の先輩一人と私で背景を書きました。最初は美術の時間に書いている感じで書けばいいと思つていたのですが教室の一面サイズの紙面を前にすると「失敗したらどうしよう。」と不安になつたりしました。しかし、他の先輩も書くのを手伝つてくれたのでその不安は消えてちゃんと背景を書くことができました。

オープニングデイ期間は授業はありませんでしたが私は授業では学ばないことをこのオープニングデイ期間中に学んだ事がありました。それはチームワークという物です。ふだんはチームワークという物にはあまり気が付きませんがこのオープニングデイ期間は全員である一つの自分たちの決めた目標に向かつて何かをする事によって、いつもより相手の意見を尊重したり、たまにぶつかって少し、やる気が失せてでもグズグズしていても何も変わらないという気持ちがどこからかわいてきます。

そんな気持はこの準備期間中のチームワークという物があるからいつまでも立ち止まらずに前に進んで素晴らしい企画を作ろうと思えたのだと思いました。

今回のオープニングデイはいつもは学べないことを学べた貴重な一週間でした。なによりもチームワークという物がどれだけ素晴らしい物かに気付けて良かつたです。



授業で得られないもの

中三 今田 宇咲
今回のオープンデイは今までの中で一番頑張った。一番楽しかった。だからこそ一番悔しかった。

私達中三は「宇宙」というテーマで今回のオープンデイに臨んだが、このテーマが決まった時、私の頭の中には既に一つの教室の中に宇宙空間が広がっているのが描かれて、なんだかドキドキした。しかし、いざ皆で話し合つたり、調べてみると次々に新しい発見や困難にぶち当たり、改めて宇宙の広さに驚いた。

あつという間に準備期間に入り、本格的に作業が始まつた。普段、学級委員を務めさせてもらつていてるが、準備期間中は背景班としても働いた。私は絵を描くことが正直苦手だ。それに、学級委員なのに話し合いの時うまくまとめられなかつた。だからこそ地味な作業でも精一杯頑張ろうと思つた。きっとそれなりに責任を感じていたのだと思う。ある時は一時間お手洗いにこもつて水のりをつくつたこともあつたが、全く苦に思うことはなかつた。それに今まで失敗することが恐くて、人に頼まれるまで何もできなかつた自分が、前と比べて自ら仕事がこなせるようになつたことがうれしかつた。やはり、仕事があるということは幸せで、自ら探しにいかなくては手にできないということを知つた。きっと忙しいというのを充実していると

いうことなのだろう。
みんなでつくりあげた部屋は想像より良いもので満足した。しかし賞をとるとなるとやはり先輩方のレベルは高く、悔しい思いをした。
きっと来年はもっと良いものが作れると思う。



高一一年 石上 直弥
班としても働いた。私は絵を描くことが正直苦手だ。それに、学級委員なのに話し合いの時うまくまとめられなかつた。だからこそ地味な作業でも精一杯頑張ろうと思つた。きっとそれなりに責任を感じていたのだと思う。ある時は一時間お手洗いにこもつて水のりをつくつたこともあつたが、全く苦に思うことはなかつた。それに今まで失敗することが恐くて、人に頼まれるまで何もできなかつた自分が、前と比べて自ら仕事がこなせるようになつたことがうれしかつた。やはり、仕事があるということは幸せで、自ら探しにいかなくては手にできないということを知つた。きっと忙しいとい

うことは充実していると

いうことなのだろう。

みんなでつくりあげた部屋は想像より良いもので満足した。しかし賞をとるとなるとやはり先輩方のレベルは高く、悔しい思いをした。

きっと来年はもっと良いものが作れると思う。

授業で得られないもの

中三 今田 宇咲
今回のオープンデイは今までの中で一番頑張った。一番楽しかった。だからこそ一番悔しかった。

今回のオープンデイまでの一週間で私は、授業では得られないものを沢山学ぶことができた。まわりのみんなには沢山迷惑をかけたが本当に感謝している。最高のオープンデイだった。

オープンデイで得たもの

高一一年 石上 直弥

悔しさよりも、悲しさよりも、僕の心に湧いた一番の感情は、自分達の作ったものが否定されているような喪失感だつた。その後は優勝の喜びを分かちあつて二組の生徒を見て、逃げ出したくなるような感情を受け、まるで本能的に会話からオープンデイについての話を排除した。

フリープロジェクトは大成功し、当日は一年に一度の大行事を心から楽しんだ。しかしクラス企画の失敗により、自分の中で今年のオープンデイに忘れない過去のようないmageがついた。それはおそらくクラスの皆も感じとつていて、まるでなかつたことのようになり、楽しかつたね、などと想い出にふけることはなかつた。

それから五日後、メールを確

認すると珍しく英文のメールが届いていた。前の学校の友人からだつた。内容は、実はオープンデイに来ていた、ということだつた。当日も姿を見かけなかつたので、僕は非常に驚いた。聞きたいことは山程あつたが、長文が苦手な僕は、楽しかつたと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

自分は結果だけに取り憑かれていたの

だ。その中でオープンデイの主旨を忘れて

いた。来てくれた人をもてなし、楽しんで

もらうこと。少なくとも一人、僕たちのク

ラス企画で楽しんでもらうことができた

のだ。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

自分は結果だけに取り憑かれていたの

だ。その中でオープンデイの主旨を忘れて

いた。来てくれた人をもてなし、楽しんで

もらうこと。少なくとも一人、僕たちのク

ラス企画で楽しんでもらうことができた

のだ。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

はなく、限りなく成功だつたのだ。この原

点回帰を達成したことこそ、僕がこのオ

ープンデイで得た最も大切なことだつたの

ではないだろうか。

たと軽く返信をした。

やはり日本とは違い、時差が無いので返

信が来るのには十分もかからなかつた。そ

して何気なく中身を読んだ。そこには、ど

うかたが本当に感謝している。最高のオ

ープンデイだった。

シンデレラとは僕たちのクラスが取り扱

った題材だ。一瞬お世辞かとも思ったが、

彼には自分が何組かは伝えていない。そ

れを読んだ時、僕の中にあつた喪失感は消え

た。それだけあの展示は失敗なんかで

カーテンコール

高一一 小林 裕季久

オープンデイ当日の夜、ホールの中の生徒達の熱狂とは裏腹に、外は雨だった。でも僕にはその雨が僕らを待っていたように思えた。後夜祭からドミトリームまでの帰り道、びしょ濡れになりながら一人そう考えていた。

中学時代を遊びほうけて過ごした僕は、いつの頃からか“青春”という二文字に憧れていた。辞書には「人生における春」というあいまいな表現しか載っておらず、言葉の意味自体にはあまり深い意味は無いだろう。しかしよく耳にする“青春”という意味を勝手に解釈させてもらうと、『何かに熱中して、楽しい学生生活を送ること』らしい。そう考えると中学時代を無意味に過ごしてしまったのはとても惜しいことをしたと思う。そう思ってもそればかりはどうしようもない。

ならば今の高校生活はどうだろうか、そ自分が問いかけてみた。自分は今、樂しいか。もう一人の自分がいるならば、迷わずイエスと答えられると思う。

昨年のオープンデイからずっと劇企画に憧れていた。その企画の人々は観る者を魅了していた。この人たちはみな魔法使いで、何か不思議な魔法を使つたのかとさえ疑つてしまいそうになつた。しかし僕は既に別のフリープロジェクトに所属していたため、劇に参加することはできなかつた。オープンデイが終わり、自分の部活動に勤しんでいた頃、僕のところに劇をやつていた先輩がやつて来てこう言った。「これからつくる演劇部に入らないか」と。僕はこのチャンスを逃さまい、逃してなるものかと思い、「はい」と即答した。運動部とは全

く違つた。恥を捨てて大声を出したり、女子ばかり周りにいる中で感情を入れてセリフを読み上げたりするのはとても樂しかつた。自分とは違う何かに変身するのほんの頃からの夢だつた。

それから毎日、演劇部が学校生活をしてゆく中での一番の楽しみとなつた。幸いなことに演劇部には男子が少なかつたため、私も参加できることとなつた。僕は素直に嬉しく思つた。

練習を重ね、半年。オープンデイがやつて來た。これまでに様々な壁に行き当たつた。それを乗り越えて舞台に立つた。ラストシーンが終わり、カーテンコールの時間となつた。舞台の上でライトを浴びながら思つた。自分はちゃんと“青春”してたんだな、と。でもこれで終わり。オープンデイも、企画も、樂しかつた時間も。舞台で一人泣く訳にもいかず、無理に笑顔を作つて堪えた。

今でもカーテンコールの終わる瞬間を思い出せる。夢から覚めた今、ともに楽しんできた仲間に、お礼を言いたい。

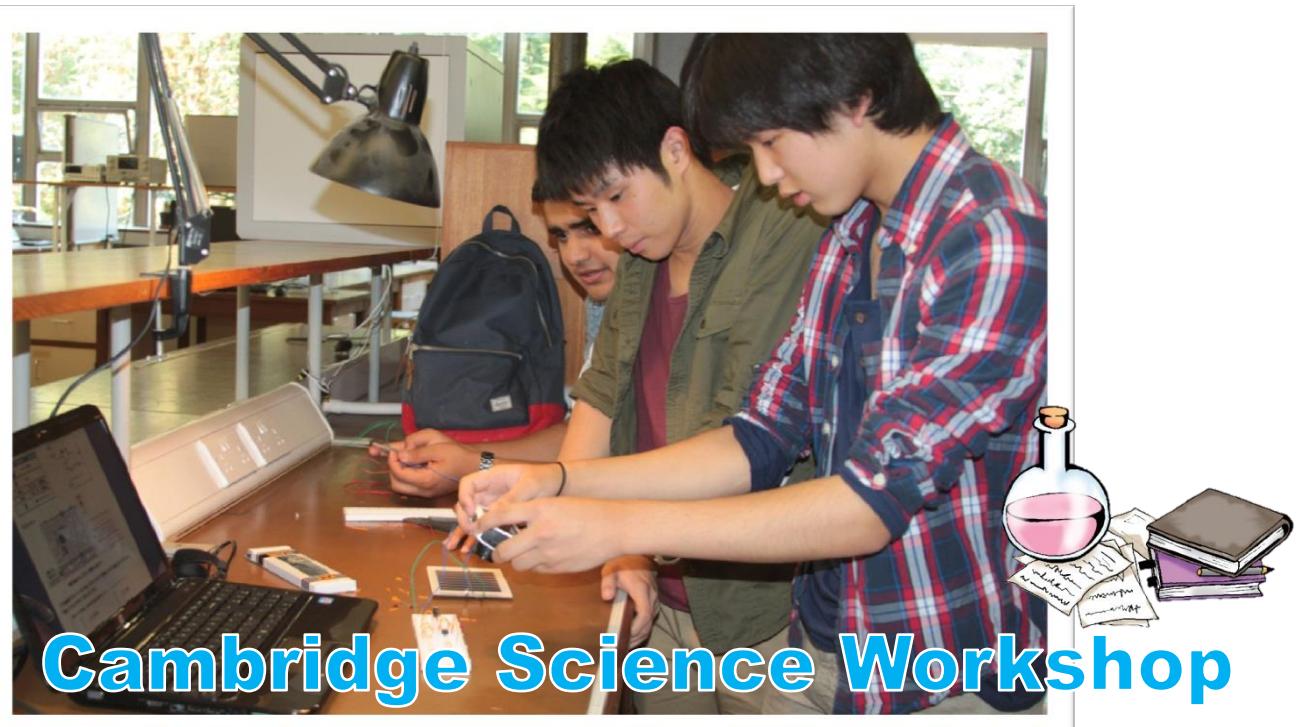


本校のオープンデイには、保護者の方々はもちろん、毎年たくさんの人たちが地元の町や村から訪れてくれます。存分にオープンデイを楽しんで頂けたようで、学校にメッセージが届きました。そのうちのひとつを以下にご紹介します。

Hello there, my daughter & I came to the Rikkyo school open day on Sunday & thought it was amazing. The standard of work was really high, my daughter & her friend were amazed as they are at secondary school, they thought your students work was much better than theirs! Everybody was really helpful & polite, we had a lot of fun especially at the bazaar & tea ceremony.

My daughter & her friend knew about the open day as they attend 2nd Broadbridge Heath Girl Guides & some of your students attend there. My daughter said she would love to spend a day at your school. Regards,





七月一七日～七月二〇日まで校に宿泊して行われたプレ・ワークショップに引き続いて、七月二一日～二七日までは、ケンブリッジ大学に場所を移して、日英ヤングサイエンティスト・ワークショップが開催されました。ケンブリッジ大学の研究者の指導の下、日英の同年代の若者達が共同で研究テーマに取り組むというのは、なかなかできない体験です。

初日の午後は、宿泊先の嘉悦ケンブリッジ教育文化センター（マリエドワード・カレッジ学生寮内）に到着するとすぐ、イギリス側の参加者と初対面しました。外で立つたままリフレッシュメント（飲み物など）をとりながら、日本人とイギリス人の高校生達が入り混じり、あちこちで自己紹介が始まりました。中には日本語で挨拶してくれるイギリス人高校生もあり、日本側の参加者達の緊張もほぐれたようです。

一日目は、朝からプロジェクトメンバーの顔合わせがありました。日英の参加者達は、十あるプロジェクトチームのうちの一つに、それぞれ配属されました。立教英國学院の三名は、『Astronomy-Star Wars: What happens when stars collide?』・『Engineering - Wireless Sensor Networks for Infrastructure Monitoring』、『Genetics - Visualising chromosome behavior during cell division using fluorescence microscopy』に入りました。どれ

その日の午後にプロジェクトがスタートすると、生徒達はケンブリッジのあちこちにある最新の設備が整った研究室に移動しました。彼らは言語の違いにも恵まず、研究者の説明に熱心に耳を傾け、それぞれの研究テーマに果敢に挑戦し始めました。最終日には、プロジェクトチーム毎に成果をまとめ、研究テーマに取り組むというのでは、全く簡単なことではありません。しかし、引率教員達の心配をよそに、どのプロジェクトチームも素晴らしい発表をしてくれました。生徒達の熱心な探究心と吸収力には本当に感心しました。また、それぞれの発表の後には、質疑応答や意見交換が活発に行われました。この部分は、事前に原稿を用意しておくことができないので、本当に研究内容を理解していなければ、対応できません。日英の高校生達と大人達を前に、堂々と発言する生徒達の姿は、まさにヤングサイエンティストの貫録でした。

プロジェクトは朝食後から夕食前まで連日続きましたが、夜は日本英の参加者達の友好を深めるべく、様々な交流会が開かれました。プレゼント交換やスポーツ交流に加え、日本人の生徒達は簡単な日本語の挨拶を教えたり、一緒に折り紙やゲームをしたりしました。書道の企画では、イギリス人の生徒達の名前を漢字の当て字で書いてあげるのが、大変喜ばれたようです。また、イギリス人の生徒達は、自國に関するクイズショーや歌などを披露してくれ、非常に盛り上がりました。また、ワークショップ終盤のある午後には、ケンブリッジ市内を観光する時間もあり、生徒達はしばし難しい研究を離れて、パンティング等を楽しみました。

充実した時間はあつという間に過ぎ、ケンブリッジを離れる日が来ました。生徒達は将来日本かイギリス、または世界の研究室で再会することを誓つて、お別れをしました。イギリスと日本の間には、文化の違いもあれば、言語の壁もあります。しかし、サイエンスという共通の興味の前では、それ越えられないものではないようでした。これから世界を担つていくヤングサイエンティスト達にとって、この一週間は、非常に貴重な経験となつたことかと思います。

アウティング

二学期アウティング

中一 齊藤 逸成

僕は、二学期のアウティングで、ライムリージスに行きました。ライムリージスは世界遺産のひとつで、ジュラシック海岸の中央あたりに位置する港町です。ライムリージスの崖から中生代の一億八千万年間に地球上に存在した生物の化石が多く発見されています。特にメアリー・アンニングという人が見つけた魚竜と首長竜の全身化石は古生物研究に役立つたそうです。



僕は、当然化石を取りに行つたのですが、化石化石を取るだけではなく、多くのことを学びました。首長竜のプレシオサウルスという生物の化石を取り出した地面はそのままではなく浜辺にコンクリートを入れてありました。

化石がよく取れる日は雨の日だといいます。なぜかというと、水にぬれると化石とたたの石では色がちがうらしく、わかりやすいようです。ですが僕達が行つたときは晴れてしまい、十個以上を目標に捜したのですが八つぐらいしか見つからず、残念でした。

ライムリージスの町名は、アンモナイトの電灯や、アンモナイトの看板があつたり、アンモナイトをさまざまにかけてあつたりしていて、おもしろい町でした。この町はアンモナイトを愛しているよう

に感じられました。

そして、ライムリージスの町には、坂があり、それを上がるのに疲れたので家が坂の上にある人は、大変だなと思いました。その坂の上方を、浜辺から見ると、崖があり、その崖を見ると、色が違い、時代が変わると、違う色の土が積もるのだと改めを感じました。

今回、化石を取りに行くときに案内してくれたガイドさんが言つていたのですが、化石をとる時は、石のどこかにわれやすいようになつている部分があり、そこをたたかず、ただ適当に力まかせにトンカチでたたくと、アンモナイトがきれいにとれなことがあります。僕は、人生でやらないような体験ができる、しかも、思つた以上に楽しく、化石 자체は少ししか取れませんでしたが、いい思い出になりました。

アウティング

高一一二 竹内 貢太

私は今回のアウティングで、買い物で員に英語で話しかけたり、メニューの表記が英語だつたり、日本では絶対に見れないような教会や町の建物を見て、改めて自分が日本という国を出て、イギリスという地にいるんだなと思った。

アウティングなどと外に出て楽しむ買い物をしたり、外食するということだけを考えて、今まで本当の意味でアウティングを楽しめていなかつたかもしれない。確かに買い物をしたり、外食したりすることはいいけれど、それはイギリスだからできることではなく、日本でもできることがあります。本当の意味でアウティングを楽しむとだ。本日の意味でアウティングを楽しむ

というのは、そこでしか見れないできないことをして、イギリスという国を少しでも楽しめるということなのかもしれない。今回私が少しでもイギリスを体験できたと思うことは二つある。まず一つ目はガイドツアーである。ただガイドさんの話を聞いているだけかもしれないが、その話の中に面白いことや知らなかつたことがたくさんあるし、ガイドさんが連れて行つてくれるところはケンブリッジでも有名なところであり、その場所のエピソードを聞けたのでとても楽しかった。私はあまり知識がないので、ケンブリッジの地名の由来がケム川であり、橋があるからだと知つた時はなるほどと感心した。

二つ目はキングスカレッジの教会で聞いた青少年たちの聖歌だ。まず歌を聞くより先に教会の美しさに驚いた。天井付近のステンドグラスや前に飾られた絵など、とても素晴らしい。アウティングはショッピングを楽しむのもいいけど、少しでもイギリスという日本ではない国のことを理解するチャンスと思えた。これからアウティングがあつたらそのことを考えて、アウティングを楽しみたい。



アウティングで得たもの

高一
朝本 和志

このアウティングは僕にとつてまともな英語の知識を持つて話す初めての外出となりました。そして、普段使つてゐる日本語が無い一時は新鮮さも与えてくれたものでした。

一番英語に触れる

ことができた時間は、

ガイドのゴードンさんの話

を聴いている

時でした。慣れない英語に耳を傾けていた

時は、まるでアクション映画を観てゐる感

じでした。「知つてゐる単語が出ないかな

」次はどんなことを話してくれるのかな」と、ドキドキ感とワクワク感が折り重なる

感覚は、本当にたまらないものでした。そ

の中で最も印象に残つたのは、ワトソンと

クリツクの話をしていた時でした。二人が

発見したDNAの二重らせん構造は、生物

の授業で話に上がつたので記憶に新しい

ものでした。その二人のことを話し始めた

ので得意げになりながら聴いていると、

二人が二重らせん構造を発見したのは

ここだよ」と建物を指さしながらさらりと

言つたのです。インターネットや言つて

いる全文を聞き取れなかつたせいなのか

もしかせんが、なにか軽い雰囲気で言つ

てゐるように聞こえました。その瞬間、遠

い歴史の中の人たちのはずなのに親近感

が湧いてきました。

他にも印象深かつたのは建造物につ

てのことです。数百年前に建てられたカレ

ッジや教会が今もなおきれいに残つてい

るのは、当時の技術が発達していと

こともありますがやはり陰で清掃活動や

維持活動をしてくださつてゐる人たちの

おかげだと思います。一般の人に楽しむ

感動してもらうためには、裏で一生懸命努

力しなければならない、ということを学び

ました。この教訓をオープンディイやこれか

らの人生に生かすことができたらいい

と思います。

ここでしか味わえないもの
高三 浅川 水晶

煙が立ち込める舞台上で、赤い旗が大き
く振られ揺れていた。

私が観劇した「レ・ミゼラブル」は、一
九世紀初頭のフランスを舞台としている。
民衆たちは、命をかけて「自由」を追求し
闘つた。私は革命軍が士気を高め歌つてい
る中、揺れている大きな大きな赤い旗
に、彼らの強い「自由」への想いを見た。

帰りのコーチの中で、ふと「自由」につ
いて考えた。現代を生きる私も、時に自由
を求めている。それは彼らと同様に規則や
自分を取り巻く環境から解放されたいと
いう気持ちから生じている。しかし現代社
会では、個人が認められ人権が保障されて
いる。一九世紀初頭のフランスではなかつ
たものが、慣習や法などによつて承認され
た上で暮らしている。これは自由の身だと
言えるのではないか。また、自由の中で自
由を求める私は、どんな社会を望むのだろ
うか。こうして改めて考えてみると、そこ



には秩序が存在しないと予想できる。そ
うなれば社会は社会でなくなる。そのう
前に、私は自由への追求に底を作り、現状
を大切にしようという姿勢を持つべきだ
と考える。

舞台上のあの場だけは、一九世紀のフラン
スであった。当時の民衆たちの魂が役者
たちによって受け継がれ、見事に生きかさ
れていたのだ。民衆たちの自由への追及が
現代社会を形成する一つの要因となり、こ
うして未来に生きている私や多くの人々
に、自由について聞きつかけをくれたの
だろう。

私は「レ・ミゼラブル」に「生きた歴史」
を見た。最後の合唱後、思わず立ち上がり
拍手をし続けた。あの劇場の一体感は忘れ
られない。そこには、人種、性別、年齢な
んて全く関係なかつた。みなそれぞれ胸を
熱くしてたにちがいない。

高校生というこの時期に、外国でこのよ
うな経験ができたのは、立教英國学院に在
籍しているからだ。この学校では、寮生活
とはいへ、日本では味わえないような経験
がいたるところにあるのだと、今回のアウ
ティングを通して強く実感できた。私は、
約二ヵ月後の終業式まで、もつともつとこ
こでしかできないことを経験しようと思
つた。

9月 8日	始業式	10月 25日	教室移動・ドミトリー移動
9月 9日	高等部実力テスト	10月 26日～11月 2日	オープンディイ準備
9月 17日	全校写真	11月 3日	オープンディイ
9月 20日	個人写真、卒業学年クラス写真	11月 4日	オープンディイ片付け、オープンディイ閉会式
9月 21日	サイエンスワークショップ報告会	11月 10日	実用英語技能検定 第二次試験（1～3級）
9月 22日	Farlington School 訪問	11月 11日	歯科検診
9月 23日	体力測定	11月 16日	Billinghurst Choral Society Concert 外出
9月 26日	午後ブレイク	11月 17日	West Sussex Guitar Festival
9月 28日	ロンドン日本人学校文化祭 訪問	11月 18日	歯科検診
9月 29日	The Regis School of Music のギターコンサート外出	11月 23日	CAMBRIDGE 英検 KET、PET
9月 30日	TOEIC、TOEIC Bridge TEST	11月 27日～12月 2日	期末試験
10月 6日	英語・社会科フィールドワーク P5～M1	12月 3～4日	答案返却
10月 9日	第33回因数分解コンクール	12月 5日	スクールコンサート、中3補習開始
10月 12日	アウティング	12月 6日	ELMBRIDGE VILLAGE でキャロリング
10月 13日	実用英語技能検定 第一次試験（1・準1級対象）	12月 7日	クリスマス礼拝
10月 19日	Apple Day 外出	12月 14～15日	高等部入学試験 A日程 中学部3年生帰宅
	実用英語技能検定 第一次試験（2～4級対象）		
	Guildford Shopping		

Farlington School 訪問



さらなるレベルへの一步
高一一 鈴木 里紗

「来週の日曜日、ファーリントンスクールのお茶会に行きたい人は?」先生はそう私たちに聞いた。絶対に行きたい。私は他の外國人の生徒と交流できる機会があると聞いた瞬間から強くそう思っていた。今の自分の英語の力を試したい。自分の性格や日常の態度をどう変えれば文化が違う人達と話せるのか学んで自分を磨きたかった。けれどもやはり当日となると、そんな強い意思は泡のようになっていた。情けないに臨んだ。

そんな時に、うちの学校の生徒会長が必死に相手の学校の生徒に声をかけようとしている姿を見た。先輩のカッコいい姿に勇気付けられて、内気な女の子を捨ててパワーをもつて見事にクリスティルという女の子と良い感じに話を始めた。

長年勉強してきた大好きな英語で自分のことを話したり、高校生らしい話題で盛り上がりつつ、二時間以上彼女と彼女の友達と途切れることなく話せた。又、大声で皆で笑うことも多かった。気付けば、自分は普通に、考えずに英語を使っていた。楽しくて仕方がなかつた。

だが残念ながら楽しい時間は永遠と続くものではなくて、立教に帰る時がやつて来てしまつた。正直、帰りたくないという気持ちはめちゃくちやあつたけれども、仲良くなれた子達からメールアドレスをもらい、また遊ぼうねと言われ、オープンデイに会う約束をした。嬉しくてたまらなかなかつたらどうしよう。自分が傷ついたらどうしよう。話す話題がなくなつたらどうしよう。そんな不安で胸が一杯だつた。そのせいか、私は学校に着いてから一時間は英語をほぼ使わずに日本人の中に守られて身を隠して存在を薄くしていた。

そんな時に、うちの学校の生徒会長が必死に相手の学校の生徒に声をかけようとしている姿を見た。先輩のカッコいい姿に勇気付けられて、内気な女の子を捨ててパワーをもつて見事にクリスティルという女の子と良い感じに話を始めた。

長年勉強してきた大好きな英語で自分のことを話したり、高校生らしい話題で盛り上がりつつ、二時間以上彼女と彼女の友達と途切れることなく話せた。又、大声で皆で笑うことも多かった。気付けば、自分は普通に、考えずに英語を使っていた。楽しくて仕方がなかつた。

だが残念ながら楽しい時間は永遠と続くものではなくて、立教に帰る時がやつて来てしまつた。正直、帰りたくないという気持ちはめちゃくちやあつたけれども、仲良くなれた子達からメールアドレスをもらい、また遊ぼうねと言われ、オープンデイに会う約束をした。嬉しくてたまらなかなかつたらどうしよう。自分が傷ついたらどうしよう。話す話題がなくなつたらどうしよう。そんな不安で胸が一杯だつた。そのせいか、私は学校に着いてから一時間は英語をほぼ使わずに日本人の中に守られて身を隠して存在を薄くしていた。

しかし当日は雨で、その上とても寒かった。だがそれでもアップルデイは行われるということで、また、開催されるところが芝生だったのでグチャヨグチャだらうなと思つた。

会場には、雨にもかかわらず、色々なお店が出ていた。お菓子を売つているお店、お花を売つているお店、小物を売つているお店などがあつた。リンゴジュースは一つのテントの下で、手動の機械にリンゴを入れて搾つていた。そこで作られたリンゴジュースは、少し酸味がきいていたが、ちょうど良い甘さで美味しいかった。私はそこで、ホットドッグとリンゴ入りのパンケーキ、カツブケーキ、リンゴ入りのケーキなどを食べた。

どれもこれも美味しかつた。リンゴの入っていたものは、リンゴの元の甘さを消さずに、リンゴの甘さを残した味だつた。日本ではあまり食べられなさそうなものだつた。

小学生の頃の小さな目立たない内気な女の子に完全に変わつていた。関わるもの面倒くさい、ただのアジア人だと思われたらどうしよう。自分で、時には泣きながら徹夜までして頑張つていた英語が通じなかつたらどうしよう。

この日、私は自分の英語にもつと自信を持つようになり、今まで頑張つてきて本当によかつたと思えた。そして、次また彼女達に会う時には、更なるレベルへと一步進みたいと私は今強く思つている。



アップルデイ

高一一 須田 真央

今回アップルデイに行つて、貴重な体験が出来たと思う。日本の都会ではもうほとんど収穫祭や、町の人たちが集まつてのお祭はないので、英国でこのような体験が出来て良かった。

フライデイケーキ

「今日フライデーの日だ」「フライデイケーキ食べに行こうよ」。毎週金曜日に放課後の時間にケーキが用意されます。「フライデイケーキ」です。金曜日の楽しみとしている生徒も多くいます。毎週違うケーキが出るので「今日は何かなあ」という楽しみも感じられます。これからも生徒と先生たちの金曜日にすてきな時間を与えてくれるでしょう。



アップルデイ

茶道部の活動

～元GCSEの先生たちを迎えて～



た。初めてですので、顧問の先生のアドバイスをもらいながらゆっくり点前を進めます。

立教英国学院の茶道部はとても幸せです。なぜなら、海外という立地なのに、関わらずお茶室でお稽古ができるから。床の間を見て、水屋で準備をし、襖をあけて畳の上でお点前の稽古をしています。

茶室は数年前に、裏千家ロンドン出張所の紹介で、ピクトリア&アルバート博物館から譲っていたもの。今も大切に使っています。茶道部は、週に最低二回は必ず活動するようにしています。ちゃんととした学校ですので、兼部の生徒が多く毎日毎日というわけにはいきませんが、週に一回は初心者向けの活動を、経験者の先輩方が割り稽古から盆略点前まできちんと教えてくれる基礎の活動を、一回は必ず週末のどちらかの日に、顧問の先生と共に稽古をしています。

さて、そんなある日の土曜日。以前、G

CSEの物理を教えて下さっていたギンバー先生が茶道を見たい、とお友達を連れ来校されました。ちょうど、五ヶ月にみっちり割稽古を行った四月の新入部員たちが、九月に入つて盆略点前を稽古し、いよいよ実際にお湯やお菓子を用意してお点前をしましよう、という土曜日だったのです。十五時ごろから稽古を始めて、ほつと一息ついたとき。お客様方がお見えになりました。ちょうど最後の生徒の番。

その番にあたつていた高一の生徒は一挙に緊張しました。彼女が先輩方に助けられながら、水屋で準備をととのえている間、高二の先輩方が一学期に作った茶道クリップを使ってお客様にリラックスしてもらいました。ちょっとしたお茶の豆知識も。質疑応答もあって、あつという間に和やかになりました。

来校した皆さんの中からお点前のお客様を招いて、初めてのお点前が始まりました。



異文化交流～茶道部～

「私、初めてだつたのに…緊張した。お疲れ様もあるけれど、ちゃんと自分でお茶を点てて飲んでもみることも練習のひとつ。お菓子やお茶の頂き方もしつかり復習しました。」「やつたあ！」

「私、初めてだつたのに…緊張した。初めてのお点前で、外からお客様を迎えてお茶を差し上げられたなんて、凄い体験です。きっとずっと先まで覚えているお点前になることでしょう。」

室の教室の外までお見送りして、全員でほつと肩の力が大きくなり抜けてしましました。

「お疲れ様。さあ、最後にお茶を点てて飲みましょう。」「やつたあ！」

お疲れ様もあるけれど、ちゃんと自分でお茶を差し上げられたなんて、凄い体験です。きっとずっと先まで覚えているお点前になることでしょう。

二学期に入つてから運動部の対外試合が多数行されました。食事後の連絡の時間には各部の部長から試合の予定や結果が報告され、衣食住を共にする仲間の活躍に皆が一喜一憂します。

男女バスケットボール部は男女共に英国のパブリックスクールであるBEDESを相手に男子は38対35で、女子は53対42で初勝利をしました。キャプテンを中心に声を掛け合い、試合に出る選手、ベンチ、観客が一体となつた試合でした。

試合中に相手チームの選手が転ぶと互いに、「大丈夫？」と言い手を差し伸べる姿、試合終了後には「ありがとう」と握手をし、また、それぞれのチームが互いに円をつくり「1・2・3 BEDE'S」「1・2・

3 RIKKYO」と互いに健闘を讃える姿には感心させられます。言葉や文化の壁を越え、相手を思いやり、讃える姿は、正に国際人です。

しているの？」「この後も授業があるの！」?」「何が国語勉強しているの？」と互いの国や学校生活についての会話を弾ませました。

男子は昨年度より地元リーグに所属しており、三学期は同相手とのアウェイでの試合が既に決定しています。また、後日女子チームには嬉しいメールが来ました。“The girls loved to playing you and you are such a nice school, do you want to play next term?”と。女子も一試合が来学期に追加され、男女共に追われる側のチームとして来学期も同チームに臨みます。三学期も男女共に勝利を飾ること、同世代の英国に暮らす学生との貴重な交流の機会となることを願います。



異文化交流～バスケットボール部～

今学期小学生と中学一年生は、Weald and Downland Open Air Museumで社会科の学習を行いました。ここには十七〜十九世紀ごろのカントリーサイドの建物が移築され、ちょっととした村になっています。ひとことで言うと、野外農業博物館、でしょうか。建物だけでなく、羊・馬・ロバが飼われていたり、水車小屋の内部では実際に小麦が挽かれていたり、レンガ造りや、ビクトリア時代の小学校体験など、たくさんリスの学校でも学習に多く使われる博物館らしく、訪れるたびに見学に来た現地の小学生たちに出会います。

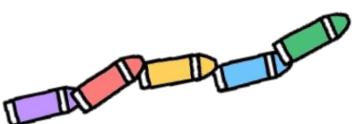
今学期のこの博物館での社会科五一ルドワークは、「チューダー・クッキング(TUDOR COOKING)」のワークショップと野外博物館の見学の二構成です。ワークショップでは、「チューダー・キッチン」と呼ばれる移築された台所で、実際に昔の農家のケーキ作りに挑戦します。五〇〇年前ごろに、一般の人々が食べていていたケーキです。始めに様々な穀物を見て学習。博物館のおばさんが、「小麦は手で挽いて細かくするの。大変よ。」「これが挽いた粉。触ってみて。」「小麦粉でパンを焼くの。この頃の食事はパンと、畑でとれた野菜。それから少しの肉。」「ジャガイモやトウモコシはないのよ。」「えーーー?」「もつと後南アメリカから伝わったの。」「あー、この間地理で習つたような気がする。」

「それから水。川や池で水をくむけれど、牛や羊もジャブジャブ入るのよ。きれいじゃないでしよう? 水の代わりに、『ある飲み物』を飲むのよ。何だと思う?」「ビールだ、ビール!」「正解、BEER。」

教科 レポート



社会科



小学生・中一 二学期の社会科フィールドワーク



……と、博物館の方はとつても話上手。いいよクッキング開始。「まずSPICE（香辛料）よ。これをかいでみて、何か当てて。」と次々に材料の香辛料が生徒たちに周りました。シナモンにジンジャリー、ナツメグの三種。「ところで、これから誕生日の人はいる？十月に誕生日の人？」「十月末だけど」と一人の女生徒が。「じゃあ、彼女の誕生日ケーキということにしましょう。」「まず小麦粉を入れて。と小六の女の子が小麦粉を陶器のうつわに入れてゆきます。次にハチミツを追加。「当時は砂糖がとつても高価だったの。だから甘みにはハチミツを使うのよ。」次の中一の男の子が卵を割ると、「はい、これで溶いて。」と木の先を七つに割いたような、熊手のような、シンプルな泡立て道具を渡されました。これも当時そのままの道具でしようか。

「今日は水道の綺麗な水を使うわね。」と言いながら、香辛料などと一緒に次々に材料をいれて混ぜ、「二つにわけて、それぞれ木の板の上で手で平たく伸ばします。」

後ろでは博物館のおじさんが薪に火をおこし、平たい鉄鍋を焼いていました。おばさんが伸ばした生地を手際よく鉄鍋に並べます。焼いている間、パンを焼く

釜を見たり、お湯をわかす大鍋を見たりしていると、あつという間にケーキが焼けました。一つのケーキはハチミツをかけて、もう一つはバターをかけて「さあ、召し上がり。」「あつ、意外においしい。」「私はハチミツのかかった方が好き。」「もう一つちようだい。」なかなかの人気でした。

ワーケーションの前後には、博物館の敷地内を見て回り、豊かな農家のお屋敷を見学しました。一階に備え付けられたトイレが注目の的。なぜなら下の通りにそのまま落ちるだけ。当時の衛生状況は？？恥ずかしくないの？？時代変われば、やり方も異なり、それには理由もついて来ます。面白いポイントのひとつ。さらに、ビクトリア朝の学校も見てまわり、当時の学校のノートが黒板を使った小さな板であったこと（ノートとして書き残せない！）や、日本のそろばんのようないい（同行のECの先生に、*Abacus*と言うのよ、と教えてもらいました）を見学しました。

さらにロバをつかつてくみ上げる井戸を発見。イギリス式の高床式倉庫も発見。ネズミ返しの部分は、マンショルームのような造形物。面白くて不思議です。あちこちでたくさん興味深いものを見学して、それぞれに学習を深めました。

因数分解コンクール
～奥深い数字の世界を楽しみました～



戦。一時間の間、生徒も教員もフルに頭を回転させ、ひたすら因数分解を解きました。今回の最高得点は高校二年生の二名の九四点、教員の最高点は日本史の先生の九八点でした。このコンクールにより立教生は、今年も奥深い数字の世界を樂しました。

漢字コンクールに並び、立教にはもう一つコンクールがあります。それは因数分解コンクールです。年に一度、中学三年生から高校三年生までを対象に行われています。問題数は一〇〇問。二五問ずつを一区切りにNo.1からNo.4までがあり、次第にレベルが上がります。例えばNo.1は二乗の公式、No.2はたすきかけを主としたものの。またNo.3からは文字のたすきかけや複二次式、No.4は三乗の公式や特殊公式を使って解くものなどの応用問題です。中学生はNo.2まででも悲鳴を上げてしまいます。また、No.4を解き切ることは高校二年生や三年生の理系の生徒でも至難の業です。二学期が始まり、徐々に学校生活に慣れ始めた頃、立教生は少しづつ因数分解を勉強し始めます。数学の先生を捕まえて、授業の質問かと思えば、実は因数分解の話であったり、過去問の冊子を個別にもらったりという光景がちらほら見えはじめます。また漢字コンクールではあまり点数をとれなかつた生徒も、「数学なら！」と理系根性を見せる者もいます。コンクール一週間前には食事の席でも「勝負しない？」と挑戦を投げかける生徒も。各々に、速報に載ることや、「五〇点以上はとる」「文系には負けない」などの目標を設定していました。

そしていざ本番。高得点への道は、No.2までをいかに点数を落とさずに取ることができるかがまず第一歩ですが、そこには数学科のしかけた罠がちりばめられ、思わずミスをしてしまつたりとなかなかの苦

因数分解に挑戦！！

- (1) $2013x^2 - 2013$
- (2) $x^2 + 5x + 6$
- (3) $x^4 + 6x^2 + 25$
- (4) $x^3 - 53x^2 - 521x + 2013$

※解答は8ページ

高等部三年生 私立文系コースの生徒達がシェークスピア観劇に外出

高3の私立文系コースではイギリス人による English Project の授業があります。今年度はシェークスピアとその作品について様々な観点から学習を進めてきました。そしてその集大成として、地元の学校の生徒達が演ずるシェークスピア劇を鑑賞。以下 English Project 担当のシャープ先生からレポートです。

* * * *

Shakespeare Schools' Festival

Over the past two terms, the H3 English project class have been studying William Shakespeare, The Globe Theatre and Shakespeare's famous love story, Romeo and Juliet. I am very pleased to report that these students have worked hard and enjoyed learning about this important figure in English literary history. Together we have looked at key facts about Shakespeare's life; the construction of the Globe Theatre, and how it was used during theatrical productions; the contrasts between theatre-going in the early 17th and 21st centuries. I think the students' greatest enjoyment, however, has come from studying Romeo and Juliet, learning about the characters and understanding the main themes of the story.

Having worked so hard on this subject, it was great to hear that this year's Shakespeare Schools' Festival would be held at The Capitol Theatre in Horsham, as this meant our students would have the opportunity to see local English schools performing various Shakespeare plays. On the evening of Wednesday 16th October, Miss Lovegrove (Assistant Head of EC) and I took the students to see a total of 4 plays: Romeo and Juliet, The Tempest, A Midsummer

Night's Dream and The Merry Wives of Windsor. Obviously, these plays were shortened versions and each had its own interpretation, for example, the students performing Romeo and Juliet had cleverly used a football theme and had the Montagues and Capulets as opposing teams; it was great to see our students enjoying this play, understanding the story and recognising the characters. Not all of the performances were so easy to follow; The Tempest, in particular, was difficult and quite a challenge, but it was still an excellent opportunity for our students to experience these plays being performed, and to see that they have shared in an important English educational tradition of celebrating the works of William Shakespeare.

英語科



生徒の活躍 フラワーショー

高2-2 太田代 真菜



自分の作品のところを見たら、“First Prize”と書かれた紙があった。え。まさか自分が？と一瞬疑いつつも、もう一度その紙を見た。素直に嬉しかった。

私は高1の初め、立教にフラワーアレンジメント部があるのを知って、友達と2人で入部した。フラワーアレンジメントなど、初めてで何も知らないし、特に深い意味があった訳でもなく、ただ“楽しそう”という理由だけで入部した。これがフラワーアレンジメントを始めたキッカケだ。

それからもう一年以上が過ぎた。少しずつさまざまなタイプを苦労しながらも挑戦してきた。

そんな時、今回のショーについて、出てみないかとアレンジメントのインストラクターである先生から言われ、高2の4人で出ることにした。しかしそう決めたまではよかったですのだが、ショーで出す作品は一からデザインを考えなくてはならない。いつもは先生が色や花を決めていたのではじめての試みだったのである。私は考えた結果、“仮面舞踏会”をイメージしたものを作ることにした。私は小さい頃からバレエをやっていて、赤の衣装に扇子や仮面を身につけた踊りを以前にやったことがあり印象に残っていたからである。

当日、前日に前もって作った作品を展示しに行き、その後審査を経て結果を聞きに再度会場に行った。そのとき、“First Prize”であることを知った。友達2人もSecondとThirdという嬉しい結果だった。

何か物を作って、賞を得たのが初めてだった私にとって、結果を知ったときの喜びや達成感が、スポーツの試合で勝った時のものとは違ったどこか新鮮な気分だった。

フラワーアレンジメント。多分立教に来ていなかつたら、やっていなかつただろう。慌しい立教生活の中で、花を活ける時間はいつもと違うひとときを与えてくれる。私はこれからも続けていきたい。



地元オーケストラと共に演 生徒の活躍



本校生徒がヴァイオリン協奏曲のソロで、地元オーケストラと共に演しました。

11月16日、Billingshurst Choral Society(以下「BCS」と)とSinfonia of Arun(以下「アラン交響楽団」)の共演コンサートが催され、Bruch(ブルッフ)作曲『ヴァイオリン協奏曲ト短調』、Brahms(ブラームス)作曲『ドイツ・レクイエム』、そしてHaydn(ハイドン)作曲『トランペット協奏曲変ホ長調』、三つの曲目が演奏されました。

BCSは、1986年に結成された合唱団です。100名を超えるこの合唱団の活動は大変精力的であり、近年三ヵ年はトスカーナ(イタリア)、ニューヨーク、プラハ、パリ、その他海外各地および国内で演奏活動を続けています。

アラン交響楽団は、イングランド南部を代表するオーケストラです。とりわけ、サセクス州においては、様々な合唱団との共演で知られています。

今回、演奏曲目一つ「ブルッフのヴァイオリン協奏曲」のソリストとして、本校の生徒が選ばれました。昨年の本校創立40周年記念コンサートを聴いたBCSの方から「是非、協奏曲のソリストに」とお招きを頂戴し、実現しました。

また、メインの「ブラームスのレクイエム」には本校芸術科のMendelssohn先生も加わりました。コンサート鑑賞を希望する生徒31名が、ミニバス三台に分乗して出掛けました。立教英國学院に深い縁をもたらすコンサートでした。

夕方七時半に始まったプログラムは、途中15分程度の休憩を挟み、夜十時頃まで続きましたが、本校生徒も含め聴衆は皆、スケールの大きな演奏に圧倒され、興奮と驚きに包まれました。



立教英國学院通信の
電子配信への切り替えに
ご協力下さい。
ご意見、ご感想もこちらへどうぞ。

infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk